学校だより
１１月号

けやき

小林市立西小林小学校
平成２８年１１月２５日
文責　校長 鶴田　純子

今年も豊作でした！！

今年の米作りは、ＰＴＡの環境整備部の方々に加え、ＪＡ青年部のお手伝いもいただき、たくさんの方々のご支援のもと無事に終了しました。台風が多かったにも関わらず、被害も受けず、おかげさまで昨年同様豊作となりました。皆様方の御協力あってのことです。ありがとうございました。今年１年の米作りを振り返ってみました。

１　５月１５日【畦づくり・畝づくり】

環境整備部、ＪＡ青年部、教職員が合同で今年の作物作りがスタートしました。田んぼは畦作り、畑は畝作りをおこないました。

２　６月２日【田植え】

天気にも恵まれ、よい田植えができました。慣れない泥の中で足をとられながらも、田んぼ全部に子供たちだけで植えました。最後にはどろだらけでした。

３　１０月２６日【稲刈り】

計画委員会の子供たちが稲刈りプロジェクトを立ち上げ、準備段階から、ＪＡ青年部や環境整備部の方々と連絡をとって、自分たちで全て段取りをしました。稲刈りよりもそれを束ねて掛稲をする方が難しく、初めてだった５年生は特に難しかったようです。委員会の児童はプロジェクトを通して「人を動かすということが難しい」という、とても大切なことを学んだようです。

４　１１月１日【脱穀】

４年生が脱穀を行いました。今では、足踏み脱穀機が残っているところは少ないのではないでしょうか。自分の足で踏みながら、脱穀機を回転させ、脱穀するのはなかなか難しい作業でした。安全面も考えて、手伝っていただきながらの作業でした。豊作ということもあってかなりの時間がかかり、コンバインの有り難みを感じた日でもありました。

５　１１月１３日【けやき祭り】

晴天に恵まれ、収穫祭である「けやき祭り」を開催しました。早朝よりたくさんの方々に参加いただき、各地区特色のある餅のメニューでおいしい餅をいただくことができました。同時に行われたバザーでは、１㎏の餅米が１６７袋あったのですが、300 円という安さもあったのか早々に完売したそうです。御協力ありがとうございました。

【学習発表会】

午後は学習発表会でした。子供たちは日頃の学習の成果を精一杯披露できたと思います。ただ、全体の発表は上手でしたが、個人となると聞き取りにくいところもあったので、そこは来年の課題ですね。がんばります。

12日のおしらせ

１日（木）避難訓練（火災）ALT 訪問
２日（金）全校体育（持久走）
５日（月）教育相談　読書
６日（火）保育園訪問（５年）
７日（水）参観日（持久走大会）教育相談
　　学校保健委員会
８日（木）非行防止教室（５・６年）
９日（金）清掃班会
１２日（月）ALT 訪問　図書返本期間～16日
１３日（火）クラブ活動(６０分)
１４日（水）読み聞かせ　読書
１５日（木）学校訪問
１６日（金）給食着持ち帰り、図書返却確認
１９日（月）冬休み前図書貸出日
２０日（火）冬休み前図書貸出日
２２日（木）全校朝会　給食着回収
　　冬休み前図書貸出日 集団下校
２５日（月）～１月５日　冬期休業（冬休み）

第２回家読リレー期間
11月12日（月）～
11月17日（土）

県小学生読書感想文コンクールで最優秀・優秀賞受賞の快挙！

宮崎日日新聞社主催の県小学生読書感想文コンクールに応募した西小林小の子供から最優秀賞１人、優秀賞１人が選ばれ、１１月１９日に宮日会館で表彰されました。コンクールには県内４３校から９５７点の応募があり、その中から最優秀賞は各学年１点、優秀賞は２点ですから、快挙です。素晴らしいですね。最優秀賞の子供達の作品は１２月に宮日新聞に掲載されるそうですが、とても感動的な感想文ですので、一足先に、ここで紹介します。

最優秀賞　４年　牟田　陸翔　君　　優秀賞　２年　小倉　智大　君

「いのちをいただく」

西小林小　４年　牟田　陸翔

「いのちをいただく」この本は、命そのものを伝えている本です。ぼくが、この本に出会ったのは、学校の給食かんしゃ月間の取組がきっかけです。その時、牛肉になってしまう一頭の牛と、その牛に関わった人たちの実際にあった話をえがいた物語をスライドで見ました。ふだん、ぼく達が食べている牛肉の向こうにこういう物語があったなんて・・。ぼくは、そこで初めてこの本の事を知り、もう一度自分で読んでみたいと思い、手に取ったのです。

ぼくの家にもおじいちゃんが飼っている牛がいます。牛の子どもが生まれると、おじいちゃんは必ずぼく達の名前から一字を取って名前を付けます。ぼくも、子牛が生まれると、ワクワクしてうれしくなります。子牛をかわいがりながらも、「今度の子牛は、高く売れるのかなあ」と思ったりしていました。ぼくは、この本を読むまでは、子牛を売るという事をそれ位にしか考えていなかったのです。この本には、十才の女の子が出てきます。牛と育ち、牛がとっても大好きな女の子です。ぼくも、この女の子と同じ十才で牛が大好きです。この女の子は、牛をとてもかわいがっていました。だから、ぼくが初めてお世話をした子牛がせりに出された時には、女の子といっしょでなみだが出ました。けれども、ぼくのなみだは、かわいがっていた牛と別れるのがさびしいという気持ちだけで、その牛達が、給食に出されたり、スーパーでならんで家のおかずになったりするという事を知ったのは、もう少し大きくなってからでした。だから、ぼくのなみだとその事を知っていた女の子のなみだは、ぜんぜんちがうなと思いました。

ぼくは、この本を読んで、牛がお肉になるためには、いろいろな人が関わっている事を知りました。この本に出てくる坂本さんは、食肉センターにつとめているおじさんです。牛のいのちをといて肉にする仕事をしています。「とく」の意味は「ころす」ということです。牛をとく人がいなければ、牛の肉を食べることはできません。だから、とても大切な仕事だということは、坂本さんも分かっています。でも、牛と目が合うたびに、この仕事がいやになると書いてありました。ぼくがもしその仕事をしていても、きっと同じ気持ちになったと思います。ぼくのおじいちゃんの牛の中にも、せりに出される時、時々なみだを流す牛もいます。それを知っているから、坂本さんの気持ちが本当によく分かります。ある日、坂本さんの所に、明日肉になる予定の牛が積まれてきました。トラックの助手席には、あの女の子が乗っていました。女の子は、牛の側に行き、「みいちゃん、ごめんね。みいちゃんが肉にならんとお正月が来んてじいちゃんが言わすけん、みいちゃんば売らんとみんなが暮らせんけん、ごめんね。」と言いました。ぼくは、その言葉を読んだとき、みいちゃんとぼくのおじいちゃんのせりに出される牛との姿が重なってなみだが出てきました。女の子の様子を見ていた坂本さんも、みいちゃんにあやまっていました。ぼくは、坂本さんのように、牛をとく人達も好きでころしているわけではなく、みんなのために仕事をしているのだなあと思いました。

最後に、女の子がおじいちゃんに、「みいちゃんのおかげでみんなが暮らせるとぞ。食べてやれ、みいちやんがかわいそうやから。」と言われ、「おいしかあ。」と泣きながら食べる場面がありました。ぼくは、お肉ではなくいのちをいただいている場面だと感じました。ぼくは、この本に出会って良かったなあと思います。それは、様々な人の姿からいのちの大切さを学べたからです。これからも、食事の時は、そのいのちや関わった人に感しゃしながら、いのちをいただいていきたいと思います。